

冬あたたか

大 佛 次 郎

光 風 社

昭和三十四年十月十日 初版発行
昭和三十四年十一月十日 三版発行

か た た あ 冬

定価 三四〇円

著者 大佛次郎
発行者 豊島清史
印刷者 菅生定洋

発行所

株式会社 光風社

東京都千代田区神田錦町三ノ四
番 電話東京(29)〇二三八番
振替東京 五六五二六番

落丁・乱丁は御取替いたします。

目次

コックリコ
過ぎたこと
朝
風
水の上
炎熱
わくら葉
別の夜
白粉花

セ　ハ　三　四　五　六　七

診断 秋 黒い外套 世間 影 球 金 暖日 魚 根

三六 二四 一六 一七 一九 二〇 二四 三三

題字 装幀

内 関
山 野
雨 準
海 一
郎

冬
あ
た
た
か

コックリコ

江見四郎が後の座席でつぶやくのが聞こえた。

「麦畑には違いないのだが。なんとも、ゆたかな景色だね。日本の田舎にも、こんなところがあるだろうか？」

運転台でハンドルを握っていた画家の折竹は、助手台に並んで腰かけていた関口に煙草を出させて口にくわえさせて貰い、ライターの火を受けようとしていたところであった。風が吹込んでいて、うまく火がつかなかった。自動車は九十キロの速力を出していた。

麦畑は道の左右にひろがっていた。麦畑のほかは何もないのだが、これが大きく美しくうねって、六月の空と地面をかぎり、ふつくと厚味のある曲線を描いている。山が遠いので、森でも見えぬ限りは、麦畑が地平線を描いているのだ。

夏を迎えた麦畑は、穂を夕日に光らせて、まだ青々とした中に、上側に金の色を流していた。その光のせいで、美しく見えたわけがなく、大地を一面に埋め尽した畑がゆたかな風景なのであった。バリから離れないところにあつて、このあたりはフランスの穀倉と言われている。

「日本のはもつと野が起伏がなく平たいよ。その上に、麦畑だけでなく、何か、他のものが見える。山があつたり、村があつたり」

折竹が、やつと火がついた煙草をすう間から、こう答えて来た。

「母なる大地なんて言うが……ここのは地面が女性だよ。日本にいたら、そう感じないだろう。見たまえ、女のからだの曲線だ。僕も、よく、そう思うのだ」

「さっきから、あの紅い花が気になつてた。何の花だ？ 芥子か？ 麦の中に、ところどころに咲いてる紅い花があるだろう」

「コックリコですね」

と、年の若い関口が言った。

「やはり、芥子の花ですね」

「フランスの田舎の、どこへ行っても、今時分、麦畑の中や、道ばたの草むらに咲いている。コックリコと矢車草だな、血のように紅いのと、紫色したのと。……印象派のモネが描いた画にもある。ルノワールにもある。フランスの田舎を描いたら、どうしたって、出て来る」

こう言いながら、折竹はサングラスをかけた顔を振向けて、車の後方を見た。

「あ、見える。見える」

と、ひとりりうなずいて自動車の速力を落して道の脇に

停めた。

「江見君も降りて見たまえ。君のホテルの部屋に、コックリコの花を取って帰ってもいい」

音と速力から急に切り離されて、夕方の麦畑の中の静かな道路に降りた。

「あれだよ、君」

と、折竹が、ずっと後の地平を指さして江見に知らせた。

「シャルトルが見えてるだろう」

最初、江見には何が見えるとも分らなかったが、今日の午後、折竹たちの案内でパリから訪ねたシャルトルの寺院が、麦畑が描く長い地平線の空に、寺と、その塔だけが幻影のように浮き出ているのを認めた。夕方の空に明るく影だけのものだったが、かくも遠くから大きく見えるものかと、素直に驚きを知った。人間の建てたものが、自然の展望の中にこれだけ大きく力あるものに見えるのかと。

「この辺が、シャルトルの寺を見るのに、昔から有名な地点なのだ。僕はパリから来て、別の道からまわったから、帰り道にこの景色を見たわけだが……」

折竹は、こう説明した。

「この道をパリからドライブして来ると、行く手の地平線に、あの寺が段々と現れて来る。あの寺院だけがだね。その他のものは見えない。シャルトルの町の人家は、側に行くまで見えないで、あの二つの塔のある大伽藍だけが最初

に見えて来る。もつと昔、馬車ぐらいいかない時代にバリだの、よその地方からシャルトルまいりに遠い道を歩いて来た善男善女がね、麦畑の中の道をたどって来て、ふいに、あの大寺院を幻のように地平に見つけた時はね、まったく敬虔な思いに充たされて地にひざまずいて祈る気持になつたろうと思うのだ」

「……」

「出現……って感じた。考えなかったものが目の前に現れたのだ。あれだけ気高く美しくて堂々とした寺院がね」

異議なく、江見も、この同窓の友人に感動を見せてうなずいて見せた。

若い時からの友達で、他のことには悪口も言い合い、反語で話すことが多いのだが、世にもすぐれて美しいものの前に、ふたりして並んだ時は素直に感動を分か合ふことが出来たのも、古い交際からであった。

折竹がコックリコの花を集めに畑の中に入って行ったのも、しばらく江見は気がつかずに、この遠い地平の寺の影に見とれていた。

一台の自動車が、その方角から風を巻いて疾走して来て、見ている間に近くなり、三人が立っている畑の脇を過ぎて行った。

「彼女でしたね」

と、関口が言う前に、江見も運転台に乗っていた人間に

気がついてた。新型のアメリカの車であった。その間にも後姿を見せて小さく遠ざかって行く。

「運転をあんな女がしてたね」

江見の言葉には、驚きもこもっていた。

関口は、とほしい給費を受けて、ソルボンヌ大学でフランス文学の勉強をしている青年なので、自分と年の頃も同じぐらいの若さでパリに来て新型の自動車をも自分で運転し贅沢に遊び歩いている大田物産の第二世とかに前から嫌悪を感じているのだった。自分の車があれば、女が自由になると言われる現代が、彼には、いとわしかった。

「旅行者か？」

江見は、女のことを問題にした。

関口は首を傾げて、

「そうでないでしょう。オペラ座の廊下で見たことがあるように思うんです」

その返事だけでは、すまなかった。

「もつとも、オペラ座なんて、僕はパリに、もう一年もいて、たつた一べん行ったきりなんですがね」

江見たちはシャルトルの寺院の中で、その女性を見かけた。あたりにフランス人ばかり見えている目に、めずらしく日本の若い女を見たと言うだけでなく、妙に魅力を感じさせて、すれ違ったのだ。石を積んだ伽藍の内部は、夏の光のまぶしい外から入ると急に夜になったように暗い。その

闇の中から有名な絵ガラスをはめた窓が、高い壁にいろいろの宝玉が輝き出たように外の光を透かして、色のさまざまな星空を仰ぐようにも見え、色彩の雨が降り込んでいようにも見えている。堂内の参詣人は影のように暗く、近付いて、わずかに顔が見えるようなものだった。そこで、女が側まで来てから、江見も日本人だと気がついた。すると、外国人にはない優しさが、皮膚を透かしてこちらの軀の中にしみ込んで来たような感じであった。黒い目、黒い髪、とがってない柔かい鼻、おだやかで愛くるしい唇。男の連れが、日本人で背のひくい、年も若く何となく不遜な表情で側にいたことは、ずっと遅れてから気がついたほど、女はこちらの目を奪った。

画家も関口もその男を知っていた。大田物産の社長の息子とかで、東京に置いても碌なことをしないので遊び半分に巴里に追いやられて来た。こう言う評判であった。そのふたりを乗せた自動車であった。

画家はまだ熱心に麦の間のコックリコの花を江見のために抜いてやっていた。

「芥子の花は毒だろう、君」

と、声をかけると顔を上げて、

「いじった手を、口に持って行かなければいいんだよ」

「さっき寺で見た女が、通って行つたぜ」

画家はその話を問題ともしないで、畑から出て来た。集

めたコックリコの茎を手でそろえている。一緒に抜いてしまった麦の穂が紅い花の間に入っていたのが、美しい色の取合せとなった。

自動車はランブイエの森の間の道路を通った。パリに近いが、まだ鹿や狐、兎が住んでいて、今も大統領の狩猟場になっていると聞いた。緑の深い森の中には、迷い易い道や、釣も可能な天然のままの池が幾つもあるのだ。

麦畑の中を通る時もそうだったが、樹や草の香が、風と一緒に自動車の中に絶えず流れ込んで来ていた。それが、間もなく、夕方の灯火をともしたパリの街路に入る。まだ空気が青い匂いを残している。と江見が感じたのは、芥子の花と麦の穂の束が車の中に置いてあるせいだった。「コックリコとは、おもしろい名だね」

と、江見が言い出した。

「何から付けたのか？ 居ねむりでもしていそうだ」

「そんな感じもあるじゃないか？ 芥子の花に」

と、折竹が受けた。

江見のホテルに送ってくれると、画家は自分も運転台から降りて来て、受付にいるフランス人の小母さんに、江見の部屋に花瓶を貸してくれるように頼んだ。

医学が専門の江見は、ドイツ語を話したが、フランス語

は読むことが出来ても会話も不自由であった。折竹が代って用を足してくれるのだった。

「では、八時頃、また迎いに来るから、それまでに風呂にでも入って、ひとやすみしていてくれたまえ」

「何もかも頼むよ」

「ムッシュユウ」

と、受付の小母さんが呼びかけて、江見の部屋の鍵に添えて、メッセエジの紙片を渡した。

江見は自動式の狭いエレヴェーターに慣れないので、狭い階段を歩いて昇りながら、メッセエジを読んだ。

フランス文だったが、マダム桐山に電話をくださるように、と書いてあった。桐山登美子は、オペラ座に近いホテルに泊っている。

英語で話を通じるが電話を申込むのが、外から帰って来たばかりの江見には、おっくうな仕事に感じられた。桐山夫人は彼と同門で早くから赤坂で病院を経営している友人の細君だったが、夫と別れて洋裁店を出して成功して、半年ぐらい前から、アメリカ廻りで、パリに、下着の研究に來ていた。江見が来たのも大使館で聞いて、昨日訪ねて挨拶に來たのであった。

部屋に入ると、江見は服を脱いで日本の浴衣ゆかたにくつろぎ、バスルームの湯の栓をひねりに行った。ひと風呂あびて、寝るつもりであった。その前に、下の小母さんがドアをノ

ツクして、頼んであった花瓶をとどけて来てくれた。
すると、電話のベルが鳴り初めた。

受話器を取り上げると、

「アロ、アロ」

と、フランス風に呼んでいるが、声から桐山登美子と江見にはわかった。

「江見ですよ」

と笑って答えた。

「四郎さん？」

と、江見を名前で呼んだ。離別した夫が二つばかり年下で後輩の江見を、そう呼ぶ習慣だったのを、聞いて覚えていたのである。

「たった今、帰って来たところですよ。シャルトルまでお寺を見に行つて」

江見は断りを言った。

「おひるから二度も、電話したのよ」

と、登美子は言った。

「それで、……今夜、あたしがいいところへ御案内するわ。すばらしい女のひとのヌードが見られるの」

「ストリップかね？」

「それには違いなけれど珍しくヴォリュームもあつて、ほんとうに、すばらしく雄大なからだ。むしろ壮嚴なくらいなのよ。ルーヴル美術館にあるミロのヴィナスの、まる

で海のような感じがすると言つたら、すこし賞め過ぎるかな。けれど、きつとお気に入るわ、もう、フォーリーベルジエルか、ムーランか、どこかを御覧なつたでしようけれど、あんなのとは、全然、別のもの。あまり人が知らない小さい家なんですけれど」

「あいにくとね。人と約束してしまつたのだ」

と、まだ水を入れてない花瓶にコックリコの花をさしただけで置いて来たのを眺めながら、江見は答えた。

「その友達が、あとで迎いに来るから」

「どなたなの？　ことわれない。十一時からだけれど、店が狭いから今の内から申込まないと、テーブルが取れないの。そうなさいよ」

「さあ、友達がどう言うかな」

「いいえ。ほかのひとが来るの、あたし、いやよ。パリにいる日本人で、みんな、うるさいんだから」

「画家の折竹君が、どこかに案内してくれると言うのだ」

「あのひと？　私、いや」

「それで、やはり今夜は、折角だけれど、だめですね。折竹君のほかに、フランス文学をやっている関口君って若いひと来る」

「つまらないの」

と、もう四十に近いのが小娘のように手放しで不平を鳴らした。

「十一時からなんだから、どこかへ行っても、途中で上手にことわって、四郎さんだけ抜けて来ない？ ランデヴウの場所きめて、こちらから車でお迎いに行ってもいいわ」「まあ、今夜はよして置こう。昼間きれいなお寺におまいりしたあとで、はだか見物でもなかりうさ。シャルトルのお寺が僕には実に、よかった。僕みたいな男が、神様であるのかも知れぬって、気がして来たんだよ」

「あしたの晩ならば、と約束した。受話器を置くと、浴槽に出し放しにしてあった湯があふれて、床にこぼれる音がしていたので、うろたえた。気がつくのが遅れたら床を洪水にするところである。その始末をして風呂をあびる前に、コッタリコの花の世話をしたやつ」。

花にさわった手を口を持って行かねばよいと折竹が言ったのを思い出したが、紙のように薄い真紅の花が可憐であった。青いままのつぼみも入っていた。

風呂から上ると、寝台に横たわって、ながながと脚を伸ばした。

レエスのカーテンをすかして外の並木の繁みが見え、道路の向う側の家々が、あかりをつけた窓だけ夕闇の中に目をあいてるように明るい色を見せていた。どれも五階の建物が、行儀よく同じ高さに並んで空をふさいでいるものだった。

（おれはパリに来ているのだな）

と、江見は、外の夜景に目をつぶりながら、特別に思っていた。

（そして、パリに夜が来ている）

意味もないことのようにだったが、大学や病院での仕事や習慣から解き放されている自由と、いつもの自分でない楽しさを、確かめようとしているものだった。毎日の新聞も見ない。ラジオも聞かない。ロンドンとブラッセルで催された学会の仕事ももう終っていた。ここでは学生時代からの夢だった画を見て歩くのと、やがて一週間ぐらい後にイタリヤの都市に、はねをのばすことである。

もっと楽しくて楽しくて、たまらないはずが。——彼は、こう思っていた。自分の一生の間にも、めったに恵まれることのない幸福な時間、との期待はあった。楽しいことは楽しいが、日本にいて空想したようなものでもなかった。

シャルトルの伽藍で見て来たビトロオ（窓ガラス）の多くの色彩が宝石のように光る姿を、ふいに彼は思い浮かべた。聖者の伝記を描いたもののほかに、バラの花の形をして、高い壁に、まるく開いた窓がある。闇に美しい火花がひらいて、そのまま凍ってしまったもののようにと云えるが、ルビイだの、サファイヤだの、ダイヤモンドだの、この地上で考えられるだけ美しいものが、声なく散らばって、それが夜のように黒い堂内にやわらかく輝いて色彩も光もあるこの世の外の星空を仰ぐような心を抱かせたのだ。

たつた今、桐山登美子に、神様がこの世にあるような気がして来たと、冗談のように放言したのだが、神はないものとしても、極楽か天国が考えられ、それが神のものだと信じたいような心持を誘うのだ。仏教の極楽よりも、感覚的なものであった。これだけ壮厳で美しいものがあつて神がないわけがない。医者の彼が、いつもの理性や常識から離れて、急にこう思い込もうとしていたのだった。

約束の時間に、画家が自分で車を運転して迎いに来て、連れて行ってくれたのは、地下にある不思議な場所であつた。

夜はすっかり暗くなっていて、どの辺の町に來たのか分らなかつたが、あたりの淋しい暗い場所に普通の酒場らしく灯火をつけた狭い入口を入つて、石段を地下に降りた。シャンソンを歌う女の声が奥から聞こえ客が集つてるのが見えた。

「いや」

と、案内に立つた折竹が急に、方向を変えて、別の通路に連れ込んだ。

「先に、牢屋を見よう」

これは、中世紀の寺院の地下室に、宗教裁判の被告を入れるためにあつた石造の牢獄の跡であつた。階段を降りて

行くと、小さい監房が幾つか並んでいた。鉄の格子が残つて、石の壁にはめてある場所もあつた。

人間がひとり、やつと入つて座るだけで、立つことも出来ないような狭いものの前にも出た。

「想像がつかないくらい、残酷なものだよ。ここに入られてたら、たいてい病気で死んでしまつたらうな」

と、江見を振り返つて笑つた時、光の加減で画家の金齒がきらりとした。

「博物館に、その時分に使つた拷問の道具がいろいろと陳列してあるけれど、人間の形に作つてあつて、中に一面、鉄の針を植えてあるやつなんか、押込んで責めつけたりしたのだ」

階段を上つて来るとシャンソンを歌う声が甘く聞こえて來た。昔の地下の牢獄の一部屋が酒場になつていて、ひろからぬ場所に、二十人ばかりの客が入つてゐる。中世紀の服装をしたボーイが江見たちを迎えて席を見つけてくれた。

低い天井に煙草の煙がこもっている。その天井も石ならば、壁もざらざらした石である。物置にでもなつていたのか、壁をえぐつてある場所を背に、歌手が立つて身振りを入れて歌っている。美しいとはいえない肥つた中年の女であつた。

「あの後の壁に掛けてあるのが、中世紀の貞操帯のほんものですよ」

江見は初めて見た。金具で出来て暗い灯火を受けて、一部が光っていた。女の腰を巻くだけの大ききで、大部分が、赤くさを吹いている。

「変なものを飾ったもので。この看板のつもりなのか」給仕が、三人分のコップにコニャックを運んで来て、無造作に卓に置いて行つた。店の亭主らしい男が雄弁に何か言つて、別の歌手が出て来た。これも頰骨の出た、やつれた顔立の女だったが、声はすぎ透つた清水のようにきれいであった。歌の意味は江見には、わからない。

「シャルトルの寺にいた女性が来て、あすこにいますよ」狭い場所に僅かに人の通路を残した程度で、客はいっぱいに入っている。だが、外国人ばかりの中に日本人を見つけるのは、振向いて見るだけで簡単だった。煙草の煙が距離を遠く見せていたが、関口が言うとおりの、昼間の女であった。連れも見覚えがある。

「ずっと、いっしょだったのか？」

他人を入れない若い男女の一组である。特別の仲でないとしても、その途中にあるものなのか？

女はこちらに横顔を見せている。舞台を正面に見ている男と話しているので顔をよく見るわけに行かなかった。首筋が、しなうくらい長く見えて、何となく、おさなく清潔な空気が肩をとり巻いていた。顎から喉が陶器のようになめらかに清潔で美しい。

江見は、自分の胸の中に変に落着かないものが入つて来たのを感じた。

女ならば正面の姿と後から見たのでは必ず落着がある。自分が急にとらえられた不安定な心持がそれとは別の、まだ理由がわからない原因から来たもののを、あやしんだ。「道楽息子が金で誘惑しようとしてるんですね。いつも、フランス人の女を連れて歩いてるんですよ」

関口は、もう敵意を働かせていた。

若くない江見は、他人のことには、かまわなかった。ボーイが運んだコニャックを、あけてしまつたので、代りを欲しかつた。どの客も、最初にあてがわれた一杯を、自分の前に置いて、おとなしく、なめるように味つていて、代りを注文した者はないような気がした。

折竹に尋ねると、

「うん、酒は一杯つくだけだ」

と、答えた。

「酒と歌とで、一人、いくらと決っている。一杯を空にしたら、あとから来た客に席を譲つて帰るわけだ。酒を飲んでしまつても、まだシャンソンが聞いたらければ、いつまで腰かけてても、誰も苦情を言わないがね」

江見は酒はいくらでも行ける。苦笑して、あたりを見廻した。

昔の地下の牢獄を使って、酒場をひらこうなどと言う物